

第14回 ことう地域チームケア研究会



くすのきセンター

1階 研修室

平成27年5月14日(木)

交流会

- 講演を聞いた感想・もっと知りたいこと
 - 自分の職種では何ができるか など
- ❁ グループ発表後は、自己紹介タイムです。

交流会テーマ

在宅看取りを考える

①在宅看取りで困っていること

②在宅看取りをするために、今私ができること

- 先生と訪問看護師さんに頭が下がります。
- 在宅で見ている人たちに緩和、看取りのことを伝えていきたいと思った。
- 緩和ケア病棟とつながっていることで安心されていると思った。

- ・在宅看取りのためのアンケートを実施。在宅看取りでは、家族と本人の同意(覚悟)が重要になってくる。
- ・本人、家族ともに不安があり、それを解消することも訪問看護の役割の一つではないかと感じた。
- ・家族は人の目を気にされて、在宅での看取りが難しくなっていることもあるのではないか。
- ・在宅でなくなる方は、ほとんどの方がお顔がきれいと感じる。
- ・在宅医療のメリットのアピールをしたほうが良いと思う。

- 看取りで大事なことは何か。
- 在宅ということだけが正解ではなく、その時の状況を大切に考え、スピードのある対応が必要なのではないか。
- 担当者、皆で話し合っって道筋を決めていくようにすることが大切なのではないか。

- 本人、家族の意思確認について

本人の意思がはっきりしているときはよいが、確認できない場合は家族さんの思いで選択されるケースが多い。しかしできるだけ本人の思いをくみ取るように、関わるものが状況を共有できるようにしていきたい。

- 開業医の先生からは、病院で連携できるところがあるのは心強いと感じている。

- 病院としては、急変した時に受け入れがスムーズにでき、在宅を望まれれば関係機関と連携し調整をしていきたい

- 親の介護に直面した時にどうしたらいいのか、どんな方法があるのか家族は悩む。どういうサポートをしていけばいいのだろうか。
- CMが聞き取り、状況を確認し、何に困っているのかを知り、関係機関につなげていくようにしたい。
- 訪問看護を導入し家でみたいと思われても、主治医の思いと食い違うことがあり、難しいこともあった。訪問看護への理解を広めていきたい。

- GHで看取りの体制をとっている

そこでは家族との意思疎通を図っている。職員の研修も行っている。職員も覚悟を持って関わり、看取りを迎えることができたケースがある。

本人の思いをしっかりと聞いておくことが必要

- スタッフが在宅看取りに先走らないように気をつけている(CM)。

- 大学でも看取りについての教育を行っている
- 看取りにかかわる医師が少ないのではないかと感じる。また、患者も在宅看取りではなく病院でと望む人も多いのではないか。在宅医療に関われる医師自体も不足しているので充実していくと良いと思っている。
- 他職種との連携。本人だけでなく家族も共に考えて関わることが大切。家族の負担についても考慮したプランの提案が必要なのでは。

- 具合が悪くなったら本人は家で見てほしいと思っているが、実際には、病院に行かれる人が多い。
- 往診が難しい夜間帯にどうしたらいいかと不安に思っている家族、本人に対しては、訪問看護が対応できることを伝えていけるとよいのではないか。安心できる体制を提案。

- どこまでが延命処置なのか、家族は悩む。点滴が延命処置なのか…。
- 何もしないこと、延命処置をしないことが悪いことと
感じている家族がいる。しかし、本人の思いを尊重
していきたい。
- 地域性、考え方により在宅での療養について違い
があるのでは

- 在宅看取りについて考える機会があるといいと思った
- 在宅で看取りたいと思っても介護が大変で精神的に迷ってしまうことがある。
- 口腔ケアの大切さ。歯科衛生士さんが口腔内をきれいにすることで食事ができるようになったことも。口から食べるためにも大事なこと

- 在宅療養は、訪問看護師と医師だけのかかわりでなく、いろいろな人が関わっていることを知ることができた
- 周囲・家族への影響、人としての考え方等を思うと、ゴールは一つではないのではないかと思う。色々な方向から見ていく必要があるのでは。本人が望む暮らしをきちんと見ていくようにしないといけないのではないか。

- 在宅看取り

以前に比べると訪問看護も増え、在宅療養に協力していただける医師も増えて在宅での療養ができるようになったのではないか。

- 死についての考え方、哲学、宗教

精神的なサポートを考えていかなければならないのではないか。

- 訪問看護を導入するタイミングは？

- 在宅看取りは、自分ひとりの思いでは出来ることではない。
- 医師は不可欠な存在。
- その人が望んでいることは何かという視点を持って支えることが大切。